

銀

鈴

第貳拾四號

審美上空想は美なる夏景の紀念より、うるさき蚊蚋と汗を催す溽暑とを除き去り、唯々笑を帶ぶる碧空、澄明なる大氣、百花亂れ發ける原野、濺々たる細流、日光樹蔭鳥聲を存せ。若し（先づ情を自然に假借して）自然に情ありと謂はば、此空想は情自然と同じきなり否情自然に超ゆるなり。此空想は自然より學習して而る後自然を凌駕するを、弟子の師に薰陶せられて而る後出藍の譽ある如し。此空想は現世より高く現世より善き世を暗裡憶得して、之に影響せられ誘導せられて謂へらく、實なる自然は此の如き高き善き世を成さんと志して、終に遂ぐる事能はざるものなりと。此空想の文字詩賦に發し、繪畫に發し、音律に發する所は、此の高焉者焉なる者なり。アリストテレスは嘗て其の簡嚴にして直ちに核心に中る口吻もて説いて曰く。史家と詩人との別は、彼の散文を以てし此の韻語を以てするに在らず、却りて彼の事相を敘するに、其の實に現行せし如くに叙し出し、此の事相を歌ふに、其の或は増上の諸縁あらば、能く如是に現行すべかりしが如くに歌ひ出すにあり。旨い哉言や、豈獨り詩のみならんや。凡そ百般の藝術として然らざるは莫し。

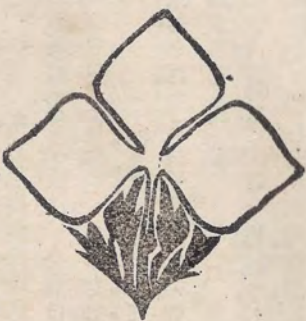
（審美極致論 森林太郎氏）





銀鈴第二拾四號揭載目次

禁	馬倒歌論(評論)……………沙上の人	紗燈集(短歌)……………服部紫葉等
轉	書牘二則(開書)	感想欄(雜文)……………今嶺丸等
載	その一……………小笠原白也	雜吟(俳句)……………飯山等
	その二……………増野翹白	社友動靜……………記者
	君(長詩)……………朝日山錦水	梧葉晴雨の卷(俳句)……………富田五春
	北村四海氏の「霞」破壊(評論)……………	寄贈雜誌(批評)……………記者
	……………つむじ風	思へる人に(長詩)……………河野翠漱
	雨中の海水浴(美文)……………明賀溪南	社告……………



鈴 銀

2 4

號 風 蕪

(明治四十年八月二十五日發行)

罵倒歌論

沙上の人

(一)

果して盛運に向へりや

聰明なる評家は曰へり、和歌は今、全盛の時代に在り、果して然る乎。新聞雜誌に載せらるる歌の數と、その作家の數とに見ば、開闢この方、蓋し當今の如く旺盛なるはなげん。然れ共、單に數字の上のみの旺盛は、以て後代に誇るべき所以にあらず、否、却て世

を誤り、歴史を汚し、一代の趣味を墮落せしむるの因たること、堪からず恐れざるべけんや。さらば、

今の時代は抑々何如

吾人は言論の自由を有すると共に、道のために先輩の進退を議することが強ち禮を失する所以にあらずと信するを以て、以下、忌憚なく管見を敘せんと欲す。

此に於て、吾人は叫ばん、

和歌は墮落せり

と、何が故に然か云ふ、先づ姑らく、派といへるもの存在することを肯定せよ、吾人の知れる限りに於て、宮中御歌所の派あり、池邊藤園氏等一流の派あり、地方に割據せる廣汎なる意義に於いての所謂舊派あり、明星派あり、蕪園派あり、渡邊光風といへる人の一派あり、根岸派あり、柴舟派あり、新派の名を潜稱せる竹柏園派あり。是等のうち、

眞に生命を有するもの

としては、僅かに一二派中の或る二三者を數へ得るに過ぎざるのみ。自稱歌人の總數に比例せば、殆んど何十万分の一、或ひは何百万分の一たるやも知れず、如斯にして、和歌の盛運を謳歌せんとす、謬れるの甚だ



しきものといはざるを得んや。一の天才者を生み出さ  
んとせば、時代は幾多の犠牲者を作らざるべからず、  
然而して、其の犠牲を以て任ずるものは、自ら常に、  
眞卒なる態度と、熱心なる研究とを持し、絶えず精進  
する覺悟を有するの資格あるものならざるべからず、  
今所謂歌人は、果して何の努むる所ありや。彼等の  
得意とするところは、唯、自大倨傲を以て、一方の流  
派に凭り、他を排擠し、中傷し、ね山の大将を極め込  
むべく頗ぶる巧妙なる技術を振ふにあるのみ試みに。  
この陋風（ろうふう）のいかに彼等の間に、滔々乎として瀾瀾しつ  
ゝあるかを、想ひ見よ。往年斯界の物議を生じ、遂に  
法庭を煩はすに至りたる、

文壇照魔鏡出版に類する。

隠忍邪悪なる手段は、今尚は隨處暗々の裏に、彼等に  
依つて演ぜられつゝあるを知る。近くは、

「明星」蒲鞭に於て

教へられたる金子薫園氏の如き、更に感謝又は明解の  
酬ふるなく、却つて陰に、其の門下と稱ふる某々等を  
して、「明星」記者を譏誣せしめしとの事實さへ傳へら  
れたり。若し夫れ如斯隠忍なる手段を講じ得ざる輩に

、臭い物身知らずの例語に漏れず、天ツ張れ大批評  
家で候のど。江戸ッ兒ならば、

「ヘン笑かしやアがる」

と鼻であしらつて遣るべきもの也、以ての外の不所存  
者といふべし。實に今の歌壇を墮落せしめ、凡庸歌人  
を跳梁せしむるものは、畢竟彼等が無責任なる放談雜  
議の罪に歸せざるべからず、吾人は今や、彼等に深刻  
なる痛罵を加へ反省せしむるの、極めて緊要の事たる  
を認む

（未完）

善牘二則

○

小笠原白也

大阪より——八疊の飯の住居、棚もあり、床もあり  
、床には駕牛の野人の置物を安じ、棚には愛讀の書冊  
二三を積み重ね居り申候。食事を茲に致さねば、器冊  
の面倒一つも無之、來客無ければ、應接の煩も無之候  
。家は幾百年の昔に建てられきものか、茅葺屋根の葺  
き更へざれば、煤も落ち、塵も積り、柱は蝕ひ、鬮は  
歪み勝に候へども、誰に住居を誇らん心も候はねば、

見ん乎、名を、

「温厚なる歌人」に假りて  
何の研鑽するところなく、十年隋容に處り、なほ籍を  
歌人のうちに列して、

贅澤華麗なる詩集

を上梓し、駄作凡作を駢列して、貴重なる舶來光澤紙  
と、高價なる出版費とを投じ、正直なる天下の讀書子  
か財裏を吸ひ上ぐるの

大膽暴舉を敢行し

義理一逼若くば詩を味ふの能力なき新聞雜誌記者が、  
頓珍漢なる一片の批評を眞に受け、乃公一世の名譽と  
誇るが如き、孰れか、歌壇發展の前途を妨げ、汚点を  
文學史上に印するものにあらざるなき。

吾人が、今の時を以て、和歌墮落の時代となし、似  
而非歌人跳梁の時代となす所以は、正に上に述べ來り  
たる理由に基づく。

更に夫の文學批評家の態度を見よ

平凡、稚氣、俗臭、氣障

蒲幅の詩集に、隨喜喝仰の涙を垂れ、筆の先きの小才  
に任せて、稱揚讚歎、下にも置かざるの醜態を演じつ

反つて横着者の住み心地よく候。殊に我が氣に適ひ候  
は、小さき庭のしつゝひに候。茶の樹の生垣、紅葉の  
植込み、一本の八重櫻は散りてとく可愛き青葉と相成  
、數株の柑子はこの頃あるか無きかの花を着け、芭蕉  
の若葉無遠慮にも、一庭を我がもの顔に日々太り行き  
申候。別けて嬉しきは、我がこの住居を包圍する竹の  
密林と、松の老幹とにて、花に聲なき春の暮も、こゝ  
に歩を邁んで榻に倚り候らへば、尙習々の清韻に耳を  
洗はれ申候。若し、豊富なる詩想を有てる人の住みた  
らんには、いかばかり嬉しからましと存せられ候。こ  
の密林を隔て、蛙の聲ども耳に致し候、やがては螢も  
飛び來べきかと、それを樂しみに。

庭前の紅葉二三葉お退り申上候、小さき葉の紅き輪廓を  
有てるもの葉片に細々たる刻み有之候ものは鉢に、樺  
や紅や青やは小子の丈よりも低き若木に御座候、御愛  
讀の書中にお狹み下さらば幸甚に候。（五月初め）

○

増野翅白

富士山より——不二の山頂を極め、今その一角に立  
ち候。行者の鈴の音きけば、一しは六根清淨の感有之  
候。蒼茫萬古の意、惡筆の汚さんを畏れて止む。



大虚可抱括と長歌したる李白の面影を憶ふも、東瀛のうたへる如く、大和心の精の凝りしかと仰ぐも、我未だ、悉さざるものと存じ候。  
(七月下旬)

君

朝日山錦水

なよやかに吹く朝の風  
青葉そよがし、香を送る。  
病める身置きて涙ぐみ  
かぎりなく君をぞ思ふ。  
——とある日君とふたりして  
薫風わたるが、あでんを  
歩みぬ、甘き睦がたり。  
並び行く、笑の若さよ。——

あゝ、たゞ君を慕ふのみ、  
儂、胸にうつれども  
君はいまさす書架の  
みうつし繪、梅と介抱く。

世の審査に與かるの士が、衷心忠實に公中に、藝術を  
談じ、作品を鑑別せんことは、吾人が切に要望して止  
まない次第である。

雨中の海水浴

明賀溪南

沛然として、雨來る。岸邊の方を見返れば、老いた  
るも若きも、うろたへ騒ぎ争ひて館に入るものゝ如し  
。我は我が好奇心に驅られ、引き返さんとはせず、  
頭のみ水面に置きて立ち泳ぐつ。  
急激の如き雨滴が、我が周圍の海面に突き入り、撥  
ね返る様は、宛として是れ、十文字の絳！  
河童の迷兒我は、浴より漕ぎ出でし漁舟の、長く白  
蛇の尾を曳けるに隨ひて、雨中を行く。颯と來り轟と  
返す風波の裡、身は飄々として、木の葉の飛べるに似  
たり、痛快真に絶す。  
而かも瞬刻を経て、清天拭ふが如く薄らかに、夕日  
燃ゆるが如く華やかなる、壯觀の來らむことを、心の  
うちに描きつゝ、

北村四海氏の「霞」破壊

つむじ風

北村四海氏の「霞」破壊は、確に現今我美術界の腐敗  
を暴露し得て餘りあるものだ。此舉に關しての輿論は  
已に、毀譽交々。世間を騒がしてゐるから、吾人は事  
新らしく、茲に其行爲の善惡を云ふまい。只、吾人は  
此の苦心の大作が、倏忽に失はれたのを我が美術界の  
ために惜しみ、一面北村氏の心裏を思ひ遣つて、轉た  
同情の涙を禁じ得ないものである。

惟へ、藝術は神聖である、藝術を談ずるには、極め  
て眞面目でなくてはならぬ、そこに一點の虚偽醜醜を  
許さない、審査不公平の聲が、いかに北村氏の耳朵を  
打つたことぞ。反抗の焰は、能く執着の繩を焼き得て  
、鐵の鎚は、あはれかよはき少女の肌に加へられたの  
だ。アートの犠牲！あゝ何といふ美しい言葉であらう  
。世は輕舉と呼び、常識外れと罵らうとも、吾人は此  
意氣あるを壯とする。破る者非か、破らしむるもの非  
か、抑々亦社界の罪か  
審査の一事は、眞に難しとする所である、希くば

紗燈集

服部紫葉

五月雨戸あけて聴きぬ深愁の聲と今  
啼くあほほとゞぎす  
薄月夜なつかし人の涙かや白蠟流る  
たへぬ愁ひに  
初夏や若葉がくれに野薔薇のほのほに  
かをりを君思ふ時  
憂愁の涙のごはむ我が袖に螢いざこ  
よ汝も燃ゆるかな  
花村静夫  
うつくしくたをやかなりや舞姫の鼓  
の手よりいざみ珠得む  
春子  
風涼し草の香ほのに家をめぐる興湧  
友よいざ共に寝む  
天の精地の靈夜のあで人を護ると思  
ふ澤のほたる火  
二万年古りしみ堂の楠木のうつろに聲



す白蟻の群

暗がりの胸なる小野も 朝日山錦水  
させり君を見しより 一道の光明は  
ああ君がみ聲ぞのこれしかすがに心  
の海の波さわぐかな  
うつくしき君を得ればわが心春の  
常世ののどけさに在り  
君去ぬやあが心いま哀寂の影曳く盧  
どまた墮ちぬべき  
しめやかに春の雨ふる音に似て縷の  
ごと盡きす戀語りかな  
君とわが胸に生ひぬる相愛の草の芽  
を喰ひ毒蟲を忌む

後藤藤朝

大夏や圃なる山の眞清水に寛かけた  
るふる郷の家  
山の茶屋駕籠に憩へば遠國のちもか  
げ見えて奇鳥啼きぬれ  
甘たるき味ひするや山の水、白き木の

日を待つはかな心と  
ああ胡蝶昨日を忘れ今日もまた毒も  
つ花のいつはりに來し  
人あまたいぶかり問へり「悲歌何ぞ君  
に多き」と戀に破れぬ」

河野翠漱

誰か知るわが半宵のたはれごと少女  
を憎むこゝろならねど  
學び得し「道」のいさめの聲に怖ぢもだ  
えぬ成ふ戀のさかひに  
人あまた中に目だちて君ぞ行く知ふ  
すどよそひ我群を行く  
君か否疑ひをめし誰なりや異端もる  
さぬ神のかはせば

以下藤朝の慈母を失へるに

ありなしの心ねちぬす日も月もほろ  
べど嘆く夜を傷み泣く  
はの白きともし火暗に消なむするい  
まはをれもひ君に泣くかな

花、額を日の照る  
森の沼紺の紗面にざれ繪すと金泥置  
きぬ天つ日の皇子

以下母を失ひて歌へる

幾由旬そこひも知らぬかなしびの毎  
に陥るなぐさめたまへ  
榮や名や誰に誇ると世を待たむ我連  
れたまへ天のみ國に  
普門品馴れぬ子ながら壇かまへ木魚  
はうちぬ終焉を泣く

菅原紅雨

にくからず思へど「我は他人を戀ひ  
す」と言ひぬ涙しつゝも  
何故の悲觀ぞ答ふ束の間も死の海よ  
かる人のおそれ  
「哀愁」は心の野邊の暗黒を幾とせ去  
らす迷はむとすや  
強きこと云はむと恃む片時も逢ひて  
の後も心ねばえず  
君知るやこの惡縁とこりすまに凶の

感想欄

△幸田露伴氏は釣りが好きで、狩獵が好きで、將棋と  
來たらお手のもの、骨董癖もあるさうだ。

△早稲田文學記者中村星湖氏は、元と醫學志望であつ  
たさうだが、先生懸賞小説に應じて、毎々當選したの  
と、三度の食事よりも文學が好きだといふので、遂々  
宗旨換をしたのだといふ。

△長谷川天溪對登張竹風の沈鐘翻譯事件は、あれきり  
で寝入ることだらう。全體どツちが乱暴なものか、他  
の論客も黙つ居らず、しつかり道を附けたら善さそ  
うなものだ。由來無責任な言論が流行して困つたもの  
である、評壇の諸公、頼みますぜ。

△三宅青軒といふ老公は、何處に何うしてゐるやら、  
近來頼と御無沙汰千萬、併し御再來を賜ふては、それ  
こそ事だ、まあ、折角善い子をしてね出でなさい。  
△石橋思案の五百圓事件は、最う早や忘られて了つた  
のか、昨日まで青筋立て、騒いだものが、ヤレ、情  
けないことだ。

△天才だ、警句家だ、觀察家だ、ヤレツレと評判され



た夏目漱石先生も、あれでね終いだらう、虞美人草とやらは、我輩一向不案内だが、朝日の讀者だつて、熱心に見るものは、御自分一人位だらう。文士小説家の運命も果敢いものだなと、しみじみ涙が出る。(以上、今猿丸)

△濱田中學の前田木風さんは、ご自作が「新詩辞典」とかの摸範例のうちに出たとかで御氣焔萬丈。

△脚氣の出ないかはりに、四圍戀の聲にとりかこまれて、ご氣焔下ることマイナス十萬丈で、とは申しませぬよ桃村さん。

△殿下行啓の砌り、石見遊摩郡の某村で、近衛騎兵少尉殿大聲にて、「騎兵の馬は三百圓憲兵の馬は百圓だから憲兵の馬は死んでも構はん、騎兵の馬を良い場所へ置け。」此時一人の若い憲兵さんが、「少尉殿不穩當な言葉と思ひます。」と云はせも果てず「國家經濟上どちらが死んで良いと思ふか。」と既に青筋「どちらも死なんが國家經濟上よろしいと信じます。」と遣つた、さすがの少尉殿、口あんぐり！(以上、濱田春子) △地方雜誌の出版せらるゝこと實にね盛んなものだ、恐らく空前の事に屬するものであらう、それと云つて

これでは投稿したものいゝのがある筈がない、同紙の俚諺正調の方がせめてもだ。

△モ一つ同紙の文界短信も「國民」のに比して頗ぶる遜色がある、賞を懸けて募る位なら、もう少し斬新で趣味あるものを吟味して欲しい。(八郎)

△本社紅雨兄は、このごろしきりと小説に筆を染めて居らるゝが、……線ばかりで、折角な所も精細に描いてない。秀才文壇でも見るやうだ、中學世界だつてあんなにはあるまい。

△七星氏の「報酬」は面白く讀んだ、何處か垢抜けのした筆致がゆかしい。(以上、ゆ生)

△本誌々友讀者の大部分は、このごろ暑中休暇で、郷里に起臥して居らるゝであらうと思ひますが、どうです田園の中に何かいゝ詩的な材料が見つかりませぬか、惜しむすにウント見せて戴きたいものです(貧書生) ◎本欄に採録するものは、文の整へるよりも、事の奇抜なるを喜ぶ。章句甚だ拙なれば、記者之を修補すべし。故に修辭に苦心するより、事實又は想像の、人を樂ましめ笑はしむる等のものを、奮つて投せられたし。(担任記者)

別にいゝ奴も見つからぬ。どんぐりの脊くらべとは、ホントにこの事だ、ね互ひに御自慢ばかりで

△山鳩は比較的地盤の固い雜誌であるが、主幹旭晃氏の鼻息の荒いには恐れ入る、近く「ホノホ」に現はれた氏の地方文壇十年史の中に、自分で無くばこの歴史を書くものはあるまいといふ意味の事があつた、自惚も、まで來れば、もう澤山だ。

△「白虹」は血沙會の機關誌で、よく出たり引ッ込んだりする雜誌だ、併し涼月氏が「本誌に稿を寄せられる士は皆岡山に縁故ある人許りで、眞に本誌のために盡されるので二度のた勤のなどは無い」と思まいて居らるるが、根ツから、その所謂本誌のために盡されたる諸士の作物に感服するものが無いテ。

△「野の花」は大分ハイカラに出來て居て、中味も可成賑つてゐるが、主筆紫川氏の短歌には感服仕り兼ねるものが多い、「明星」で大分羽振をよくしたが、ツイ昨年頃までは「文庫」で駄作悪作を公表してたものだ、ホイこれは失禮。(以上、楚様)

△「萬朝報」の時文小品には、どうも面白い作物が出ない、流水先生の評からして、既に文をなして居らぬ、

雑吟

月出で、雨後の若葉のそよぎ哉 歸山  
夏の月 譚然として城の址 紫葉  
白百合や垣に傘干す家二軒 春子  
卓上の卦に興盡きて晝寝かな  
がゝる夜は落武者あらん夏の月 藤朝  
馬鈴薯の雜然と光る曇さ哉  
雲の峯扇の風に崩れけり

次號編輯締切九月十日

▲社友動靜▼

◎森崎桃村は野球選手として松江の競争大會に加はり  
◎増野翹白は七月入學試験を終へて日光中禪寺湖白根  
山等の勝地に吟懐を養ひ次いで富士登山をなせり◎菅  
原紅雨は客月末廣島嚴島等に遊び◎後藤藤朝は全月慈  
母を失へり◎月森神來三明春子小川堯月龜山曉花椿靜  
岩等は孰れも故山に起臥せり◎旭山錦水は今尚ほ病褥  
に横り◎藤本晚花木村秋浦は旅行を終へて歸省せり◎  
河野翠漱は夏季休暇中社内に在りて専ら社業に従ひ社  
友の往訪に接し居れり。



梧葉晴雨の卷(其三)

富田五香作

◎羽風○梧月◎静處△鐵笛▲水人評  
△出代の名残りや京の小買物

◎名残りをさらけ出したる所奥行きなし  
「出代りや京の名残の」としては如何  
暈夜や橋行く人の笑聲

△陳腐◎平凡

○落花すや配所の窓のつれづれに

◎これでは人が落花するといふやふに聞える  
○海棠や園守の妻美しき

◎半陳△艶麗其度を超れば厭味に陥つ

◎藍瓶の上も祭の座敷かな

◎頗ぶる奇▲疑なきにしもあらず◎如何にも奇

◎心太竹林の風吹き通る

△涼味可掬◎敘法に少し申分はあれど先づ

△烟立つや若葉の下の泊り舟

◎清新◎印象明瞭感じのよき句なり

◎馬に乗つて城下に這入る若葉哉

○這入る不可△着想に於てとる◎城下にを「城

下を過るとしてとる

◎馬繫いで人水を飲む若葉かな

△初五不熟◎繫ぎまでせんで「下りて」で澤山

◎霜を吹く夜明の風や庭牡丹

○庭を白として▲庭は不可△庭牡丹とは窮せ

すや◎僕も白としてとる

◎金持ちて驕る凡夫の牡丹哉

▲凡夫何とか色なほしあらん事を△生硬◎生

硬とは認めざれど用語の露骨に過るを惜む

▲時鳥月下に淡き寒山寺

○どこを見しにや◎淡きといふ形容はいかい

◎行燈の夜はとく明けて時鳥

△如此構想は古し

◎竹や庵に四月の佛事

○「佛事あり」として▲賛成△私も

明朝旅途に上らんとす、忙手拜讀、杜選の至り多罪々

々(裏辻鐵笛)評言は己に諸子の悉され居ることもある横

着ながらやめました失敬(羽風)衆評既に盡せり「眞名

假ノ名句の八千草の扇かな」(桐一葉) (完)

思へる人

寄贈 雜誌

河野翠 識

夜畫わかたす、香に句ふ  
園のくもりにあやまちて  
たすら思へ。君は花

清しく張れるみ腫は  
涙の露のかかるとも  
なほにはやかに薫じぬれ

誰か切の世、我が戀に  
君を許りすと捉てけむ。――  
れうよりがちの性なれば

み髪のかなよびみ衣の香

いざどうながし給へども。  
ああ四はれの身をぞ泣くと

△俳藪(二の八)紅葉月人雨氏の遺文、澁柿園氏の季題  
研究和歌まつりあり、掲載の俳句皆な艶麗なり。

△白虹(三の三)涼月氏、書齋漫言七面氏の薰風記土屋  
鳥呂氏の濱町河岸あり、長尾琴雨氏のほたるは題材極  
めて陳套なり。

△浮城(四の九)稻青氏の活觀察へき氏の陰餘雜筆あり  
句作の時間亦興あり。

△大坂文壇(一の二)六號漫錄應募画選評あり

△荊冠(二の四)杉村氏の夢は君へどあり

△初雁(一の七)孫水氏の新季寄考及句評の事あり。

△朝虹(三の七)奥瀬霞翠氏の黙。深山景林氏の局外觀、等

△ほのほ(五の二)小木曾旭晃氏の地方文壇十年史沼田

笠峰氏の陳腐岡夕風氏の炎夜雨氏の阿波の山より若山

牧水氏の初戀物語故花房柳外氏の川上音二郎小坂眉水

氏の旅情高木翠雨有松十葉氏の画あり。

△藻の花(四の三)盧子庵訪問記木母庵氏の死屍解剖、董

漱氏の朝の窓立版氏の國民俳壇あり。

△白菊(二の二)△明ボノ(四十五)△新文壇(二の八)

△茶話會(三)△三餘の友(一の四)△浪花(三の三)



● 社 告 ●

○懸賞俳句募集 △課題秋季雜吟△二十句以内△選者羽風梧月兩氏共選△同一の句二通に明記△天地人六名へ薄賞を贈る△切九月末日

○五選五歌集募集 △題隨意△切九月三十日△出詠一人五首を限る五首より多からず少からざるを要す△出詠者には四種郵便を以て順次歌集を廻覽に供す佳調五首を選びて幹事に報告すべし△詠草は幹事に宛て直接發送の事△幹事、石見邑智郡田所村菅原正男

○本社維持費寄贈 森脇柳仙氏より金八拾五錢寄贈せられたり茲に感謝の意を致す

○最近入社社友 月森神來君、椿靜若君、土佐兼次郎君、明賀一夫君の四氏なり

○前號訂正 夏の海中「青き風ふく夏の」は「青き風ふくはつ夏の」「郷の家」は「ふる郷の家」椿靜若の作中「ほのゆる」は「ほの見ゆる」の誤なり。

○表紙繪 近く改刻すべし

○和歌無料添削 返草用貳錢郵券添付下名へ送稿あるべし、一週間以内に修補の上返草す。宛名石見邑智郡田所村菅原正男。但一ヶ月二十首以内に限る。

銀鈴社清規

一 文藝を愛するものは何人とも雖も本社社友たることを得べし

一 社友は「銀鈴」誌代六ヶ月分以上前納者たることを要す

一 社友は社内同人を経て本誌編輯其他の議に參與することを得

一 社友には有効期間毎月銀鈴を無代配送すべし

一 支部(社友五名以上)社友は本社直接の社友と同一の待遇を得べし

投稿募集

一 和歌 一 俳句 一 長詩

一 美文 一 小説 一 評論文

一 感想欄 一 小品文 一 文壇消息

一 繪畫 一 歌會句會の詠草

用紙は半紙散文にありては一枚二十行とし一行二十四字詰。種類を異にしたるものは各別紙に認むる事。半切葉書に書したるものは原稿整理上没書することあるべし。秀逸なるものは社中同人の議を経て薄謝を贈る。

○ 廣 告 ○

月刊 雁 定價 一部 金五錢  
六部 金參拾錢

○一巻七號(七月十五日發行)目次

▲女夫柳へさ生 ▲夏雜咏 ▲春龜亭 鹿すゐ  
▲蝶へさ選 ▲新季寄考 孫水 ▲殘春句稿へさ  
▲俳眼鏡 月斗 孫水、嵐江等四六版三十二頁  
▲九號分募集句  
▲花火(四明選)▲落し水(稻青、一轉選)  
八月十日切各題十句以下  
新潟縣西蒲原郡 初雁發行所  
地藏堂町三一〇

月刊文 誌代一部 五錢五厘  
學雜誌 六部稅共 參拾錢  
白菊 十二部同 五拾五錢

△近藤紫山△阪上野雨△金子薰園△菅學應△渡邊光風  
△本圖力涯△窪田而笑△夢中庵△井原青外  
△森田雷死久、以上の諸氏は何れも本會客員なり  
△大々的一千名懸賞募集の計畫あり入會者は、や好期に際せり乞ふ振つて入會あれ  
△左の券切り抜き同送者には特に一割引とす

白菊會費一割引券(銀鈴)

發行所 伊豫國宇摩郡 野中村 白菊會

文學 文庫 一ヶ月七錢  
半年四拾錢  
見本八錢

▲第三卷三號八月廿日發行

●優美に高尚に趣味津津たる好雜誌を得んとする雅士は宜しく本誌に來れ

●第三卷三號を以て大發展大飛躍を試ると共に紙數を五十余頁の多きに激増し地方文壇の精華を網羅す

●所載の小説美文論文新体詩短歌俳句等文壇の異彩を放ち殊に俳句は毎號懸賞募集あり

●誌代六ヶ月分以上前納者諸君に懸賞抽籤番號券を呈し大景品を呈す

岐阜縣惠那郡笠置町

發行所 東濃文壇社



● 廣 告 ●

月刊 大坂文壇

定價一部八錢  
六部參拾六錢

第一卷第二號目次 (八月一日發行)

- ▽ 歸り姿(小説) 蓮半醉
- ▽ 世の波(小説) 廓如
- ▽ 戀詩人(脚本) 山本紫汀
- ▽ 道成寺(狂言) 白蘋
- ▽ 牧師の家(譯文) 疎影
- ▽ 六號漫錄(評論) .....
- ▽ 應募書短評 石井柏亭
- ▽ 和歌▽俳句▽小品文▽記者の領▽讀者の領

發行所 大坂市北區木幡町三三六 若菜會

表價定鈴銀	定	價	一	郵	稅	廣	告	料
一部	金五錢五厘	金五厘				一行五號活字二十四		
六部	金參拾錢	.....				字詰貳拾錢半頁貳圓		
十二部	金五拾五錢	.....				前金切は帶封に朱圈		

明治四十年八月二十三日印刷  
全 四十年八月二十五日發行

島根縣邑智郡川所村大字下田所七三二

編輯兼發行人 河野岩雄

全 縣全 郡川本村大字川本五三八

印刷人 原 入太郎

全 縣全郡全 村大字 全五三八

印刷所 邑智活版所

石見國邑智郡田所村

發行所 銀 社

銀鈴第貳拾四號(毎月一回二十五日發行) 明治四十年八月二十五日發行  
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可